プレスリリース

令和２年２月１３日

報道　各位

美郷町役場

美郷バレー・リーフレット作成の報告について（ご案内）

いつも、当町の取材及び情報発信についてご協力いただきありがとうございます。

さて、当町の目指す「活気あふれる明るい町」と「町外と活発な交流のある町」の２つのビジョンを実現するために、町外のひと・もの・かね・情報を取り込み、交流人口や関係人口の拡大を図ることを目的に、４つの事業の柱の１つ、「山くじらブランドの進化」があります。これまでの取り組みをさらに成長させるため、産官学民が集い、新しい取組みが生まれることを期待する“美郷バレー”構想を令和元年度、礎の年として進めてきました。成果の第１号として、共同開発の電柵部材の開発・実用化が３月から始まりますが、町内外に人に「美郷バレーとは何ぞや？」という構想理念や、過去に取り組んできました山くじら地域ブランド創出との関係を綴ったリーフレットを作成しました（サイズは以下のとおり）。地方と都市の連携による地域づくりの共創など、今後、の山くじらの取組みを示唆する内容や、地域に根付いた取組み、軌跡を物語風に記し、新たな協定連携先などの説明資料に活用したり、QR コードから美郷バレーの取組みを知ってもらう内容となっております。

つきましては、今後、成果が徐々に表れる中、多くの方々に「美郷バレー構想」の理念を知っていただくために、ご都合のつく中、少しでも取材いただきますようよろしくお願いし、ご案内にかえさせていただきます。

（担当課であります美郷町役場山くじらブランド推進課がリールレット説明などいつでも取材に対応いたします）

記

リーフレット規格　：Ａ３　４つ折り　両面カラー
表　山くじら物語　第５章「美郷バレー」
裏　山くじら物語　第１章「鳥獣対策」～第４章「雇用・定住ローカルビジネス」
２０００部印刷
絵図は、美郷町統一デザイン等を使用

問い合わせ先
担当：美郷町役場山くじらブランド推進課
電話　0855－75－1636

美郷バレー構想

山くじら物語〔第5章の幕開け〕

山くじらブランド創出から、
地方の変革と創造、
そして革新のステージへ

過疎化や
高齢化社会に
生きるヒントが
眠っている…

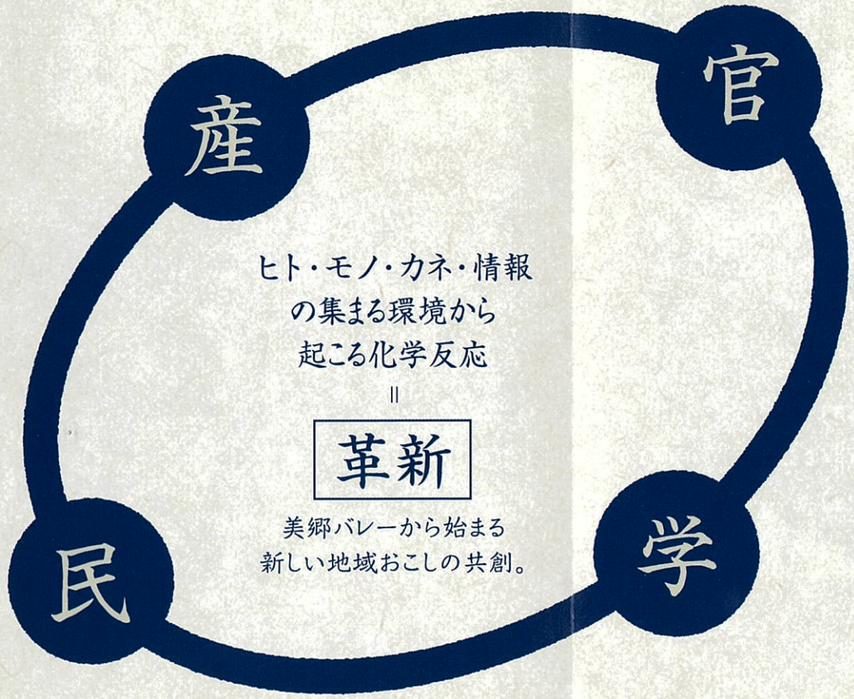
おおち山くじら
"山くじらの郷"
島根県美郷町

辺境の地『美郷バレー』から始まる地方と都市の変革と創造

「山くじら物語 第5章『美郷バレー構想』とは？」

アメリカ・カリフォルニア州シリコンバレーは、そこに行くと新しい技術や情報、人脈が手に入るといわれる世界経済をリードする中心地。分野こそ全く違うものの、「鳥獣害対策と住民の取組に関しては島根県美郷町に行けば、新しい技術や情報が入り、人脈も広がる」という思いから、日本をリードする「鳥獣害対策版シリコンバレー」、すなわち産官学民が自発的に集い、互いが刺激し合って地域活性化の革新につなげていく環境の場が「美郷バレー」です。山くじら物語 第1章から第4章までの山くじらをツールとした物語への共感による関係人口を広げ、環境づくりの場を構築していくことが美郷バレー構想です。

《美郷バレー構想図》



小さな町の地域おこしから
全国を舞台に新たな
山くじら物語が
展開していく

❶美郷町の概要

◉何もない町にある
無限の資源と可能性

長寿県の島根県内19自治体にあって人口10万人当たり百歳以上高齢者数の割合が1番高い、長寿の町、美郷町は人口約4700人、高齢化率はおよそ45%。町には高校や総合病院、ホームセンター、ドラッグストアがなく、ローカル線も2018年に廃線となった陸の孤島です。町全体を縫って広島県から日本海に注ぐ江の川の氾濫原に集落は点在し、まさに美郷バレーといえる地形です。

しかし、この何もない辺境の地に唯一あったものが〝知恵〟〝ノウハウ〟という無限の可能性をもった資源でした。

❷山くじら物語 第1〜4章

◉全国から多彩な人材が
辺境の地に集う

辺境の地で、既成概念にとらわれない逆転の発想と20年の時が育んだ知恵やノウハウは、獣害対策や山くじらの活用を超えて人間力や地域力を磨き、これが地域の魅力につながっていきました。美郷町で、山くじらをツールに様々に繰り広げられる人間模様、特に農村女性の笑顔と町の取組理念に惹かれて、町外からのファンや人材が集まってきました。

❸山くじら物語 第5章

◉「美郷バレー」から地方と都市の
新たな暮らしの革新が今はじまる！

獣害を逆手にとって住民が地域づくりにいかしてきた20年間（山くじら物語 第1章〜第4章）。次のステージは鳥獣害の問題とその対策をきっかけにさらなる多様な人や企業がつながり、プラス志向の化学反応による革新が都市と地方の暮らしを元気にしていく…山くじら物語 第5章の幕開けです。

第5章は、地域づくりに同じ思いや理念、互いに共感した産官学民の仲間が美郷バレーに集い、個々の専門分野にとらわれることなく、分野の既成概念を越えた知恵や発想を共有しながら具現化し、その輪がさらに広がって地方と都市の新たな価値観を創造していきます。

※2020年3月現在

美郷バレーを形成する産官学民の一覧

獣害対策をきっかけにした
分野連携・横断による産業・地域施策の革新

美郷バレー顧問　麻布大学名誉教授 **田中智夫** 先生

産

株式会社おおち山くじら（島根県美郷町）
鳥獣の資源利用の広域的拠点及び
産地形成による利活用のノウハウ共有

株式会社クイージ（東京都日野市 ※美郷支店あり）
獣肉の製造・販売や獣肉利活用の
経営コンサルによる連携

株式会社テザック（大阪府大阪市）
合繊メーカー、分野横断による設置省力化
獣害対策資材の共同開発及び普及

タイガー株式会社（大阪府吹田市）
鳥獣被害対策部材の製造・販売メーカー、
農研機構との製品開発や鳥獣対策被害防止の
啓発及び普及、分野横断による獣肉利活用の企画

官

津市（三重県）
獣害対策をきっかけとした住民交流、
商品開発。獣害対策や地域づくりの
情報共有や技術交流

丹波篠山市（兵庫県）
獣がい対策をきっかけに地域活性化に
つなげるための情報ノウハウの共有、
人的交流の連携、人間と野生動物の
すみ分けによる共生

学

麻布大学（神奈川県相模原市）
美郷町を大学教育・学生の研究及び
教育のフィールドとして活用

**国立研究開発法人　農業・食品
産業技術総合研究機構**（農研機構）
美郷町をフィールドとした獣害対策の研究成果を
全国に発信・普及啓発

民

**特定非営利活動法人
里地里山問題研究所**（兵庫県丹波篠山市）
獣がい対策をきっかけに地域活性化に
つなげるための情報ノウハウの共有、
人的交流の連携、人間と野生動物の
すみ分けによる共生

〔お問い合わせ〕
美郷町役場　山くじらブランド推進課
〒699-4692　島根県邑智郡美郷町粕渕168番地
電話 0855(75)1636　ファクシミリ 0855(75)1218

美郷町版・今昔物語

既成概念にとらわれない、
イノシシは『害獣』ではなく『貴重な資源』…

地域と獣害との苦闘の歴史は発想の転換から宝になった『おおち山くじら物語』

１９９９年（Ｈ11）に物語は始まります。

イノシシ等の獣害対策を地元猟友会に依存した体制から改め、被害者である農家や自治会関係者等の住民を主体とした駆除班に再編成することで、狩猟と被害対策の目的の線引きをしました。組織には新たに狩猟免許を取得した女性の方も3名いました。まさに元祖狩りガール。住民主体・主役の被害対策の始まりです。

休止していた既存のカモ食鳥処理施設をイノシシ食肉処理施設として再利用し、それまでは捕獲後に埋設処理されていたイノシシの資源利用に取組む、山くじら生産者組合が誕生します。組合ができたことで、イノシシを〝おおち山くじら〟と命名したブランド化が進み、処理負担も軽減されました。イノシシは食肉として出荷するほか、町内女性グループが中心となって皮革製品を開発・販売したり、地元飲食店で山くじら料理として提供されるなど、様々な形で活用し、6次産業化を実現しています。

また、農研機構の指導の下、獣害に強い畑づくりを実践し、学ぶ圃場〝青空サロン〟は、さらに手づくり市場の開設と運営につながり、内発的な地域づくりに発展しました。

このイノシシの捕獲から資源化、地域づくりまでの取組には、多くの住民が関わっており、獣害対策を契機とした個性ある地域づくりへと成長しました。また、山くじらの取組に魅せられた若者や企業が、閉所した保育所を利用した缶詰製造加工を始めたり、高齢化した山くじら生産者組合の食肉生産の事業を継承するなど、２０年間かけて〝おおち山くじらブランド〟を創出しました。

そして第5章『美郷バレー構想』に物語は続いていきます。

【山くじらと銀世界】※2005年商標登録

第１章
鳥獣被害対策の抜本的改革

“捕獲確認方法の見直し”
“住民主体の組織の再編制”

1999年、美郷町は農林水産省中国農業試験場（現：農研機構西日本農業研究センター）が行っていた総合的な獣害対策の研究に調査研究フィールドとして協力するとともに、野生鳥獣から農作物を守ることを学びました。

同時にそれまでの害獣捕獲体制を見直し、猟友会に依存した組織から、農家・住民を主体とした駆除班組織に再編成。狩猟を目的とする猟友会が中心の体制から、獣害削減を目的とする農家・住民の組織に変わることで、主体性を持って自らの農地を守るという意識が促されました。このことが『補助金』『猟友会』『行政』という３つの依存体質から地域が脱却する第一歩となりました。

【山くじらと石楠花、早春の山々の息吹】

第２章
資源利活用

“夏イノシシ（駆除イノシシ）の資源利活用”
“イノシシの生体搬送”

イノシシの駆除期間は3月から10月まで。しかし、この時期に捕獲されるイノシシの多くは痩せて脂肪のない赤身の肉質のため、市場での商品価値がなく、ほとんどが埋設処理されていました。本当に『夏イノシシ』には価値がないのか。これを確かめるため、2001年から近畿中国四国農業研究センター（現：農研機構西日本農業研究センター）と共同で夏イノシシの肉質を分析した結果、高タンパク・低脂肪でヘルシーな肉であることがわかりました。

また捕獲現場から食肉処理施設までイノシシを生かしたまま搬送する技術が開発され、適切に処理された安全なイノシシ肉を安定供給できるようになり、夏イノシシの商品価値も一層向上しました。

【山くじらの親子と江の川の幸】

第３章
地域づくり・コミュニティビジネス

“農村女性の輝きと高齢者の活躍”
“住民のたまり場創出”

野生動物から農作物を守る学びの圃場『青空サロン』や毎週水曜日の早朝に開かれる『青空サロン市場』の運営は地元のお母ちゃんたち農村女性に任されています。またイノシシのなめし皮を使う、皮革製品創作グループも誕生しました。

美郷町がある地域では、保育所やお店が閉まり住民同士が触れ合う場所が失われつつありました。そんな中で畑や市場、クラフト活動など、楽しみながら活動する「たまり場」が復活して、人と人、人と地域、人と暮らしの絆が紡がれていきました。

町外の人を魅了する山くじらの郷、最大の魅力は「農村女性の輝き」と「高齢者の活躍」です。

【山くじらと五穀豊穣、石見神楽】

第４章
定住・雇用・ローカルビジネス

“山くじら物語第４章の新たな主人公”
“ローカルビジネスは町おこし”

2004年、おおち山くじら生産者組合が設立されてから10年経過し、高齢化によって、この先の食肉利用が危ぶまれる中、株式会社クイージが事情を汲んで美郷町に支店を構えることになりました。そして地域も山くじらに特化した地域おこし協力隊員を迎えました。クイージは閉所した保育所を山くじらの缶詰製造工場としても再生させ、地域のカンフル剤になりました。おおち山くじら生産者組合は、地域おこし協力隊の任期を終えて定住した若者たちが担い手となり設立した、株式会社おおち山くじらに引き継がれました。山くじらの取組に定住・雇用によるローカルビジネスという地域活性化の柱が誕生しました。